

音もなく夜はふけすみて遠近をちちの里の犬こそ声あはすなれ

藤原為子

『玉葉和歌集』「雑」の一首。

「音もなく夜はふけ、あたりは静かに澄みきって、遠く近くの里の犬が、声を合わせて鳴いているのが聞こえてくる」。(下句は係り結び)。

まるで近代短歌のような親しさを覚える歌である。「里の犬」は、里の人家に飼われている犬だろう。勅撰和歌集のなかで犬そのものを詠んだ歌は、『玉葉集』『風雅集』にしか見当たらない。あまりにも庶民的だからか、和歌にはふさわしくないと思われていたらしい。

そしてそのような既成概念を打ち破ろうとしたのが、京極派の歌人たちである。『玉葉集』の撰者である藤原なまか為兼は、定家の曾孫。保守的な二条派歌風に対して、革新的な京極派歌風を模索し、「心のままに詞のほひゆく」(『為兼卿和歌抄』)、つまり思うことそのままに詞ことばは自由であつ

てかまわない、と主張した。

この歌の自然な詠みぶりも「犬」の登場も、そんな新風のなかから生まれたのだ。作者のためこ為子は為兼の姉。

『玉葉集』にはほかにも二首、犬の歌がある。

さ夜ふけて宿守やどもる犬の声高し村しづかなる月の遠方をちかた

伏見院

「夜がふけて、家を守る犬の声が高く聞こえる。寝静まった村を月が照らす、その遠くから」。

里びたる犬の声にぞ知られる竹より奥の人の家あは

定家

「田舎びた犬の声が聞こえてきてわかった。竹林の奥に人家があるんだなあ」。

伏見院の歌は、静けさのなかにも人や犬の気配がどこか親しく感じられる。一方、定家の歌は『源氏物語』「宇治十帖」の一場面(匂宮におうのみやが夜更けにこっそり浮舟を訪ねる途中、村の犬に騒がれる場面)を基にする。

為子の歌とともに、古典の情景のなかに聞こえる犬たちの声がなつかしい。

(小島ゆかり)

